

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです

「決着をつける」のが早い人 常に「スピード」を意識して仕事せよ

「仕事ができる」といわれる人は、能力があるということ以上に、効率よく仕事をこなす処理スピードが速いということが評価されている場合が多いのです。同じ会社に勤める、ある一定レベルの社員同士においては、各人の「能力」の差はそれほど大きくありません。というのも、採用の段階である程度選別されているので、多少の差はあっても、基本的スキルの欠落などはないのです。では、何処で仕事の結果に差がつくかというと、仕事の「効率」であり、「スピード」です。午前中だけで四つも五つも仕事を片づけられる人もいれば、同じ時間をかけて一つの仕事しか片づけられない人もいます。能力は同じなのに結果に差が出るのなら、その原因の大半は仕事を処理する「スピード」です。

たとえば、かつては手紙やファクスのやり取りによって解決していた問題を、今ではメールで済ませるようになりました。手紙やファクスなら、郵便事情によって相手に届くまでの日数が変わったり、ファクスが本人の手元に届くまでのタイムラグがあったりします。つまり、仕事の結果と、本人の処理能力とが必ずしもイコールではつながりませんでした。

しかし、メールとなるとそのスピードは、本人の処理能力と直結します。送信ボタンを押せば、即相手の元に届くからです。レストランのランチタイムの売り上げは、12 時から 13 時までの一時間におけるお客様の回転数で決まるといわれますが、メールもまた、一定時間にどれだけ多くのやり取りができるか、どれだけ早く決着まで持ち込めるかという「回転数」がカギになる点では同じなのです。

このように昔と比べると、現代はシステム的にも仕事のスピードが速くなっているうえ、個人の処理能力のスピード差がダイレクトに「仕事の差」へとつながるようになってきました。

ちなみに、「処理能力」とは、具体的にいうと「判断力」のことです。判断力というのは、単に「どちらが正しいか」を決めることではなく、「こちらの方向性でいこう」「このやり方でやってみよう」と思い切ること、割り切ることも含まれます。余裕を見て一週間かけてあれこれ検討しながら仕上げた仕事と、「デッドライン」を決めて集中的に手早く一日で仕上げた仕事を、あとで比較してみると、そのクオリティに大きな差はありません。

この仕事はこれで終わり、と潔く割り切ることが、仕事のクオリティを損ねずに処理スピードを上げることに繋がります。常に「スピード」を意識して仕事をする。どんどん判断し、仕事に決着をつけていく。この習慣を若いうちから身につけておけば、いち早く仕事ができる社員としての資質を身につけることにつながるはずです。

能力が一緒なのに結果に差が出るのは何が違いますか？

()

「処理能力」とは具体的にいうと何だと言っていますか？

()